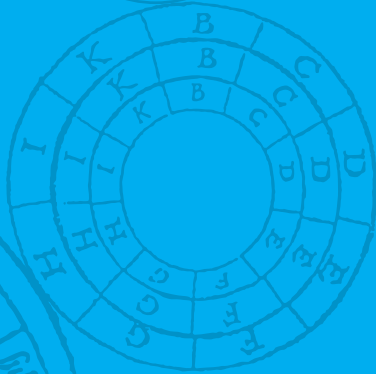
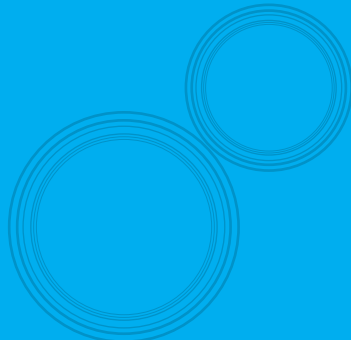


# 字環字府

Interfaculty Initiative in  
Information Studies  
Graduate School of  
Interdisciplinary  
Information Studies  
**The University of Tokyo**



number.

**26**

Gakkan Gakufu

# Interview

GAKKAN GAKUFU

Interfaculty Initiative in Information Studies/Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

## 相澤清晴教授 インタビュー

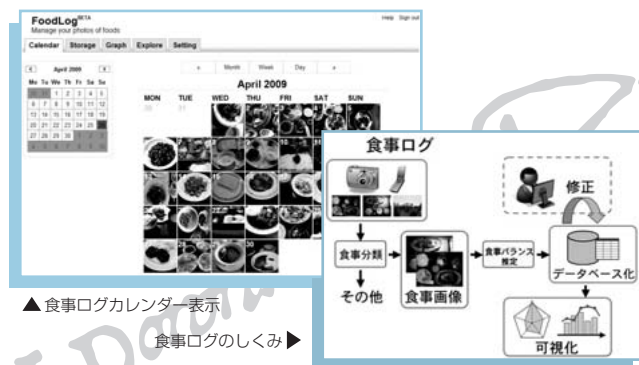
### 食事ログ …受容性の高いライフログを考えて…

人の生活をデジタルデータで記録に残すライフログ。相澤研究室では、これを“食”に特化した「食事ログ」を構築、Web上で公開した。相澤先生ご自身の記録を見せていただきながら、この食事ログについてお話をいただいた。

#### ● 仕組みはどうなっているのでしょうか

食事ログのアカウントはwww.foodlog.jpに行けばすぐに作れます。それから写真共有サイトのflickrに、デジカメや携帯で撮った写真を毎日送るだけで食事画像のカレンダーができます。携帯で送れるのでとても簡単です。構成としてはすごく身軽で、食事ログの方は一切写真を持ちません。持っているのは写真のありかだけです。flickrから食事ログユーザーの公開写真だけを定期的にクロールしてきて、それをカレンダーに入れます。その時二つの画像処理をします。一つは食事が食事じゃないかの区別。単なる二分類と思うかもしれませんが、これが使い勝手の上では重要です。人がいちいち食事画像かどうか区別しなくても、これがあれば普通にflickrを使っているだけで自動的に食事の画像だけを選んでカレンダーを作ってくれるんです。

二つ目は栄養推定です。一回の食事の栄養を推定し、一日の栄養バランスやある期間での変化をグラフで見せてくれます。一般の人に分かりやすいように、栄養の分類には農林水産省と厚生労働省が共同で作った食事バランスガイドの5分類を使いました。主食(ご飯やパン)、副菜(野菜)、主菜(肉や魚)、乳製品、果物の五つのカテゴリーがあり、それぞれのSVという単位は、およそ一つ二つといった大雑把な単位です。与えられた画像を処理してこの5分類がそれぞれ何SVになるのか推定をします。その際にこれが魚だとか米だとか認識しているのではなく、あらかじめ正解データセットを何百も用意しておいて、そこから画像の特徴量を取り出しておき、こういう特徴量を持っていたらこういう正解データセットに対応しますという対をたくさん求めておきます。機械学習で強引に分類器を作っているんです。特徴というのは色や明るさの変化の様子とかだけなんですけど、このデータセットに使った学生のケースでは、食事バランス推定でほぼ8割、食事分類に至っては9割以上の精度でした。集めたデータはデータベース化されてWeb上でみることができるので、間違っているもそこで自分で修正することができます。



▲ 食事ログカレンダー表示  
食事ログのしくみ▶



#### ● 使ってみていかがですか…

食事ログはこの4月に公開しましたが、研究室の中ではバグ出しや改編を繰り返しながら去年の12月から始めていて、僕は6ヶ月間続けています。おかわりした分は入れてなかったり、全部の写真撮っているわけじゃないので、忠実な記録ではないのですが、遷移のグラフを見ると、常に野菜が足りないとか傾向がわかるし、毎日同じような生活を送って同じようなものを食べている気がしていたけど実はそうじゃないことがわかったり、毎日変動しているのがおもしろくて、これがなかなか楽しいんです。ただ、バランス推定の画像処理はもっと精度をあげたいと思っていて、個人の偏りに適応する仕組みなどを検討中です。

#### ● 食事ログを始めたきっかけは?

一番最初は画像符号化や画像圧縮の研究をやっていて、そのうち、人が一生で見る映像のデータを撮りためていったらいったい何ができるんだろう、何が問題になるんだろうということを考え始め、そこからライフログの研究に入りました。一生分のデータと言っても今、2万円ぐらいで買える1テラバイトのハードディスクが10個あれば理論的には入るんですよ。最初はPCを背負ったり、家の中にセンサーを埋め込んだりする大がかりで実験条件の厳しい研究をしていましたが、それはやっている人にすごく物理的・心理的負担が大きく、受容性が低いものでした。そうではなく、もっと気軽にできる、応用が特化したライフログのスタイルが必要だと思うようになってきました。ちょうど食事を対象にしてみたいという学生がいたこともあり、食事ログを始めました。好きなものを好きなように取れるというのがライフログのあり方のスタイルの一つだろうと思います。食事というのは技術系以外の人も興味を持ってくれ、ずいぶん影響力のあるテーマだと思います。何を食べたかってことはコミュニケーションのネタにもなるので、今後、SNSのようなソーシャルメディアとくっついたりすると、そこからもっと楽しいことができるような気がします。

食事ログの他にも、ネットの世界では睡眠の記録を取るサイトがあったり、携帯電話で運動の記録が取れたり、Wii Fitでは体重やトレーニングのグラフを作ってくれたり、いろいろな形でログをとれるような仕組みが世の中に現れてきています。好きなログをばらばらに取っても、それらはデジタル情報なので、集約・処理ができます。そこから見えてくるものを探し出して可視化することがこれからのライフログにとって重要なことではないかと思っています。

## 『「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座』の開設

情報学環では、2009年4月より『「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座』（代表：坂村健教授）を開設しました。（社会連携講座とは公益性の高い共通課題について、東京大学が民間企業や独立行政法人等から受け入れる共同研究の一環として、学部や大学院等におく講座をいう。）

本講座は、日本の急激に老朽化が進行している社会資本（道路、鉄道、電力等）のメンテナンスという今後重要になるであろう社会的課題に対し、急速に発展している情報技術を活用してメンテナンスコストを削減することや、異常情報を早期発見することなど施設管理機能の高度化を目指しています。加えてユビキタス技術等を核にし、新たな情報基盤を活用したビジネスを創出し、インフラ・イノベーションを実現することを目的としています。

本講座は、情報学環に加え、首都高速道路（株）、東京電力（株）、東京地下鉄（株）、東日本旅客鉄道（株）、（株）日立製作所の5社で構成されています。また、研究協力機関として、総務省、経済産業省、国土交通省、独立行政法人土木研究所、東京都、日本電信電話（株）などが参加し、インフラ分野とICT分野における日本を代表する産・官・学が一体となって取り組む体制となっています。

社会連携講座が行う最初のイベントとして、4月15日に山上



会館において、本講座の設立記念シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、講座の構成員、研究協力機関から約90名が参加する中、パネリストの皆様から、社会基盤施設の維持・管理の重要性と情報技術に対する期待、こうした期待に対する「ICタグ」等の情報技術の可能性、「東京ユビキタス計画」として新宿地区の実証実験等のインフラの高度化に向けての取り組み事例等が発表され、本講座を開始するにあたっての課題認識や活動の方向性が提示されました。

今後は、社会連携講座の主旨にのっとり、幅広く情報発信しながら様々な活動を行っていく予定です。（特任教授・石川雄章）

## 『光州5・18』映画上映会 韓国の「過去」と「現在」、そしてメディアを語る

5月29日、福武ラーニングシアターで映画『光州5・18』（原題：『華麗なる休暇』、2007年、韓国）の上映会が真鍋祐子研究室と林香里研究室「メディア研究のつどい」の合同企画で開催された。

この上映会は、学際情報学府「社会情報学基礎」の公開講義として行われ、映画上映前のレクチャーと終了後のディスカッションへの参加が必須であり、3時間半の長丁場となったが、多くの参加者が来場し、活発な議論が飛び交う上映会となった。

「5・18民主化抗争」は、市民・学生たちによる韓国の民主化運動の中でもっとも激しく軍部と対立することになった、1980年5月18日から27日までの韓国南部の光州におけるデモ運動を言い、日本では「光州事件」として知られている。軍部により、朝鮮戦争以降最大の死傷者を出したこの事件は、当時の韓国メディアから黙殺され、光州以外の地域はこの事件を知らされなかったが、韓国民主化運動はその後、大きく進展していくこととなった。

映画上映前に行われた真鍋准教授によるレクチャーでは、当



時の様子をおさめた音声資料や映像資料を用いて、映画のテーマであるこの抗争について説明がなされ、史実的な要素が映画『光州5・18』の中でどのように用いられたか確認した。ディスカッションでは、「5・18民主化抗争」が「暴徒」による暴動、事態と呼ばれていたことについて場内から様々な意見が飛び交い、実りのある上映会となった。（林研D1・李美淑）



## *The University Urgently Needs to Focus on Programs for Academic English*

III introduced a course "Academic Communication in English" two years ago. The aim of this course is to enable future researchers and educators to play active roles on the global level. Having started as a small initiative, we have gathered experience that could be extended further at the institutional level. Being now in the third year, we encourage all the doctoral students to participate in this class. It is our expectation that systematic and institutional support for this initiative will increase now that III has set up an English-only program (IT Asia Course).

David Buist, who has been in charge of this initiative at III, writes about his experiences and future outlook. (Kaori Hayashi)

## Academic Communication in English (ACE)

David C. Buist

### Identifying Achievable Goals

In 2005, Prof. Hayashi proposed the idea of creating a course to teach academic writing skills to students in the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies. The aim initially was to enable doctoral students to write research papers in English for submission to academic journals. However, this proved to be an unrealistically high goal for a single semester course. It was therefore decided to institute a second course (ACE) with the slightly less ambitious goal of increasing students' ability to participate in the international academic community through the medium of English. Instead of focusing on the very specific and complex task of paper writing, this course seeks to give students a basic grounding in the practical use of English in the social context of academia. Besides learning how to write bio-sketches and conference abstracts, students are also given instruction on the delivery of academic presentations and the creation of visual media, such as slides and posters.

### English for Academic Purposes

Experience has shown that the English education received by students before entering graduate school does not adequately equip them with the skills necessary for the effective use of English in an academic context. With the exception of the fortunate few who have experience of long-term residence in English-speaking countries, their functional communication skills in English remain poor. However, even those who are able to communicate effectively in English have yet to master the "register shift" to a style of speaking and writing that is appropriate to the academic context. While they may be able to communicate in a more informal way about everyday subjects, they lack the ability to express precise



and abstract ideas in a formal style as required in academia. The first task of the course is therefore to instill an awareness of the different registers and styles of communication appropriate to different contexts of usage.

### Focusing on Communication Skills

Rather than focusing purely on linguistic skills, this course seeks to develop students' communication skills, enabling them not only to transmit messages about their research to a wider audience but also to interact with the international community of scholars in their respective fields.

#### 英語を母語としない人(特に日本語が母国語の者)の典型的な間違い

- スタイルの問題:**フォーマルな学術的発表場面でくだけた口語体の表現を使ってしまう。
- 発表の態度:**過剰の言い訳や謝罪を述べ、卑下する態度をとる。逆に、その反動として威張っているかのような態度をとってしまうこともある。
- 連語・慣用語句**
- 代名詞の用法:**第3人称代名詞の指示対象が不明。
- 単数・複数の使い分け:**数えられない名詞を複数形に、複数形が必要なときに単数形を使用する。
- 冠詞:**数えられる名詞の単数形に冠詞を抜かすこと。
- 前置詞:**日本語の連想からstudy, discussなど他動詞の対象語に前置詞をつける。
- 関係節:**前置詞の省略。
- 時制:**過去形と完了形の使い分けなど。

## 学際情報学府入試説明会報告

6月13日、福武ホールにおいて、平成22年度修士課程入試説明会が行われた。先頭をきって石田学府長より、学環・学府としてちょうど10年を経て、来年4月に大学院生としてこの機構に参加することになれば、より成熟・発展が期待される次の10年のスタートラインと一緒に立つことになるなど、来場者を鼓舞するメッセージが語られた。鼎談では、山口泰先生の司会のもとで、OG・OBの橋田さんと岡本さんから学府での研究生生活や、学府の特徴の1つであるコース・研究室を越えた横のつながりの重要性について、また、制作展などへの積極的な参加を通して様々なスキルを獲得したことなど楽しい思い出話があり、来場者から頂いたアンケートでは大変参考になったという意見が多数であった。参加者は355名で、例年より100名近い増員を達成することができた。最後に行われた学環・学府めぐりでは、会場は人で埋め尽くされ、まさに学環の特徴ともいえる“知の熱帯雨林”と化していた。(企画広報委員長・柳原大)



## 複合現実感システム IOCへプレゼン

先端表現情報学コース・池内研究室では4月17日、オリンピック東京招致のための国際オリンピック委員会(IOC)評価委員の現地視察において、複合現実感システムを用いたプレゼンテーションを行った。このプレゼンでは、ヘッドマウントディスプレイを用いて、晴海のスタジアム建設予定地の実映像にスタジアムの3Dモデルを重ねて表示し、2016年のオリンピック開催の様子を仮想的に再現した。このシステムでは、魚眼カメラを用いて光源環境を取得し、これに合わせて仮想物体の陰影を表現することで実映像と仮想物体の違和感のない合成を可能にしている。またネットワークを介して位置情報やイベント信号を同期させるため、複数の鑑賞者が視点移動の自由を保ちながらシナリオに沿った演出を体験することが可能となった。当日のプレゼンはIOC評価委員の方々から大変な好評を得て終了した。(特任講師・大石岳史)



## 記録映画

### アーカイブ・プロジェクトWS開催

5月23日、福武ホールにて、記録映画アーカイブ・プロジェクト第1回ワークショップ「イメージとしての開発ー岩波映画・佐久間ダムを見るー」が開催された。まず『佐久間ダム第一部』を16ミリフィルムで上映。続いて『佐久間ダム総集編』を部分上映した。上映後、筒井武文氏を聞き手とし、元岩波映画製作所カメラマンの小村静夫氏より『佐久間ダム』撮影の秘話や当時の製作所の実情が語られた。その後、町村敬志氏から、開発映画『佐久間ダム』がどのように観せられ／観られてきたかに関して、続いて藤井仁子氏からは映像テキストとしての『佐久間ダム』が現代にどのような意義をもたらすかに関しての報告が行われた。最後には鳥羽耕史氏を迎えて全体での討論も行われ、会場からは幻の『佐久間ダム第一部』を鑑賞できたことへの喜びの声が多数寄せられるなど、ワークショップは好評のうちに幕を閉じた。(丹羽研M1・松山秀明)

## メディア研究のつどい Yahoo!ニュース祝前氏講演

5月27日、公開セミナー「メディア研究のつどい」(林研究室主宰、電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座)が本郷キャンパスで開催され、ヤフー(株)メディアサービス本部の祝前伸光氏が、日本最大のニュースサイト、Yahoo!ニュースとそのビジネスモデルをテーマに講演した。ヤフーなどのネット企業の躍進が新聞業界の凋落を促しているという疑問に対し、祝前氏は「ヤフーは新聞の敵ではない」と明言、今後も「協業」を推進したいと話した。その理由は、①Yahoo!ニュースには新聞社のニュースが不可欠、②ヤフーは新しい広告技術を提供することで新聞社のネットビジネスに貢献できる、というもの。また、祝前氏は一時的にアクセスを集める娯楽的な情報より、政治、経済、社会などハードニュースを大切に考えていると述べた。メディア研究のつどいへの問い合わせは、iii.media.studies@gmail.comまで。(林研M1・フクダ マルシオ)

## 先端表現情報学の教育・研究とは?

先端表現情報学シンポジウムが5月31日福武ホールにて開催された。当日は五月祭2日目、キャンパス内がイベントや模擬店にぎわう中、本シンポジウムも約100名の学生や一般の方々にご来場いただいた。福武ラーニングシアターでは、鈴木高宏コース長によるコース紹介や荒川忠一教授による制作展の紹介のあと、コース教員によるパネルディスカッション「先端表現情報学の教育・研究とは?」が行われた。それと並行して福武ラーニングスタジオでは、コース所属の17研

究室および制作展や総合防災情報研究センターのパネル展示があり、説明員による解説も行われた。スタジオの一角には教育部有志による学環カフェも併設され、来場者有志・関係者合同の交流会が持たれ、活発な意見交換が行われた。(准教授・大原美保)

## 制作展 iii Exhibition Extra 2009 開催

6月11日から16日にかけて、学生によるメディアアートの展示会が開催された。本展示会は、科学技術と融合した芸術の新しい表現を学生自らの手で発信すると共に展示会の企画・運営を含めたプロデュースを目的に、学際情報学府の授業の一環として行われている。新しい体制・環境となった今回は、「そばにある発見。」というテーマを設定し、制作展のあり方を問い直しつつ入試説明会にあわせた調整を行い、2つの会場にて展示を行った。多くの来場者を迎え、最後まで活気のある展示会となった。次回の制作展は12月初旬により大きな規模で開催予定。詳細は<<http://i3e.iii.u-tokyo.ac.jp/>>にて。(須藤研M1・柳瀬一貴)



## 「ユビキタス空間情報社会基盤の構築」開催報告

4月22日、医学部鉄門記念講堂において、日本学術会議情報学委員会ユビキタス空間情報社会基盤分科会シンポジウム「ユビキタス空間情報社会基盤の構築」が開催された(後援・情報学環)。本分科会は、坂村健・総合分析情報学コース長が委員長を務め、実世界と情報世界が一体となるユビキタスコンピューティング環境

実現のための社会インフラ整備を目指し、とくに空間情報整備に関する提言を行っている。今回のシンポジウムでは、未来の空間情報サービス、市民参加型GIS、地図情報の利用、地理空間情報活用推進基本法、ロボットナビゲーションについての講演が行われ、来たるユビキタス空間情報社会について議論が交わされた。(准教授・石川徹)

## 受賞報告

### ■日本ITU協会賞・国際活動奨励賞

越塚登准教授が(財)日本ITU協会主催「第41回世界情報社会・電気通信日のつどい」式において、第37回日本ITU協会賞・国際活動奨励賞を受賞。5月15日に表彰された。准教授起草のユビキタス技術の動向草案二つが、2008年8月にユビキタス関連の最初の世界電気通信連合(ITU)勧告として採択され、また、日中韓のNID標準化会合の議長も務めるなどユビキタス技術の国際標準化活動に積極的に取り組んだ功績による。

### ■映像情報メディア学会

#### 丹羽高柳論文賞受賞

「スケルトンを用いたTime-Varying Meshからの動き抽出と類似動作検索」(唯野隆一、山崎俊彦、相澤清晴 / 映像情報メディア学会誌Vol.62, No.5, pp.792-742, May, 2008)によって相澤清晴教授が平成20年度丹羽高柳論文賞を受賞。5月25日、同学会総会において表彰された。

## シンポジウム開催のお知らせ

### ■Media Exprimio & MELL Platz シンポジウム2009「情報があふれかえる社会から物語が編みあがる社会へ(仮題)」

●日時:2009年10月3日(土) 13時~17時30分

●場所:工学部新2号館9階 情報学環スペース

●共催:JST CREST「情報デザインによる市民芸術創作プラットフォームの構築」、MELL Platz

※詳細は追ってご連絡します。

<<http://www.mediaexprimio.jp/>>をご覧ください。

# Book

## 『デジタルアーカイブにおける「資料基盤」統合化モデルの研究』

研谷紀夫 著 / 勉誠出版



本書は、2006年度に学際情報学府に提出された博士論文に加筆・修正したものである。これまでの文化資源保存の歴史を考察した上で、文化資源の電子化によって形成されつつある、アーカイブの概念を超えた、新しい知識創成のあり方について考察している。

address: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: [news@iii.u-tokyo.ac.jp](mailto:news@iii.u-tokyo.ac.jp)

the member  
of editorial  
board: 柳原 大・林 香里・前波奈保子・福 博充

editor's note:

ニュースレターの編集に携わるようになり、本号で4号目となりました。私は校正・校閲を主に担当していますが、このニュースレターは編集委員の4人以外にも、様々な方々の協力によって成り立っています。

前号の編集後記でもふれましたとおり、今号から表紙が大きく変わりましたが、このデザインを担当して下さるデザイナーの方もその一人です。毎回イメージにぴったり合うデザインを提案してくださいませ。そのデザインの色を忠実に再現し、ニュースレターとして印刷して下さる印刷所の方もその一人です。

また、ご多忙の中、貴重な時間を割いてインタビューに応じていただける学環の先生方、原稿を執筆していただける院生のみなさまなど挙げるときりがありません。

様々なバックグラウンドをもった人々が集う、その多様性が情報学環・学際情報学府の特色であるように、このニュースレターもその名のとおり「学環学府」に関わる皆さんの協働の賜物だと私は思っています。(H)

Interfaculty Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

.26

07. 2009

